

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第643号 平成25年11月15日

## 風花の朝

秋山小兵衛は、冬木立をぬけながら、ゆっくりと瑞雲寺へ近づいて行く。  
少し前から風が出て来たとおもっていたら、はらはらと雪が舞いはじめた。  
風花(かざはな)であった。  
だが、快晴とまではいえぬが、朝空は晴れている。

これは、池波正太郎の作品である「剣客商売」の「風花の朝」に出て来るワンシーンです。

現代俳句歳時記（波郷編）によると、「風花というのは、本来の意味は、初頭の頃に風に誘われた様に小雨がぱらぱらと落ちてくる事であったが、転じて青空が見えるのにちらちらと雪が落ちて来るのをいう様になった」とあります。

我が家でも先日、朝起きると外は晴れ間が見えて明るいのにも、雪がちらちらと舞い落ちていて、狭い庭先にはうっすらとした白いカーペットが敷かれているのが、印象的でした。

風花や 氏素性なき庭ながら 石塚友二

その儚げに空から落ちて来る雪を見ながら、「なる程、これが風花というものかな」としばし感じ入ったところです。

風が強過ぎても、また、無風でも雪は舞うようには落ちてこないし、また、日差しがなければ、雪の白さが映える事もなかろうと思うと、その微妙な匙加減を「風花」と表現する日本人の豊かな感性と表現力には本当に驚かされますし、素晴らしいと思います。

ところで、「風花」は、もともとは先程も紹介した様に「風に誘われたようにぱらぱらと落ちてくる小雨」の事を表現していましたが、享和2年（1802年）の「新季寄」の中に「雪国にて、空くもらずして散る雪」という解説がなされている（波郷編「現代俳句歳時記」から）そうで、これが、雪の花を表現する「風花」の嚆矢といえそうです。

ところで、「剣客商売」で活躍する秋山小兵衛は老中田沼意次と篤い親交があったとされていますが、この田沼意次は、享保4年7月（1719年9月）に生まれ天

明8年6月（1788年7月）に亡くなっています。秋山小兵衛が同時代の人だとすると、この頃の「風花」は、まだ風に誘われるように落ちてくる小雨の事を指しており、ちらつく雪を見ても「風花」とは思わなかったかも知れない…というのは、余計な詮索というものでしょう。

さて、ちらつく雪を見上げて「風花」等と風情を感じていただけるのは、雪の殆ど降らない江戸ならではの話で、雪国ではそうは行きません。

江戸時代の人「鈴木牧之」が著した「北越雪譜」の中に「江戸には雪の降らざる年もあれば、初雪はことさらに美賞し、（中略）雪を賞するの甚だしきは繁花のしからしむる所也。雪国の人これを見、これを聞いて羨まざるはなし。」と表現していますが、この実感は、雪国に住む者としては今も同じです。

実際、舞い落ちる雪を見ながら「これが風花だ」と感じ入った翌朝には、どんよりとした空の下、一面数センチの雪が積もっていました。根雪迄にはまだ少し余裕がありそうですが、でも確実に寒さは厳しくなっており、いよいよ本格的な雪の季節が到来したのだと、覚悟を決めたところです。（塾頭：吉田 洋一）